

SSKO

# Remission

2026/4/7  
NO.275

栃木DARC News Letter

- P1 栃木DARC職員  
「依存症回復支援  
におけるAIの役割」
- P2 栃木DARC職員  
「活動報告」
- P3 3rd StageCenter  
「心の豊かさを取り戻す」
- P4 3sc ウイメン  
「過去の自分今の自分」
- P5 1st StageCenter  
「マイストーリー」
- P6 プログラム風景と紹介  
スタッフの独り言
- P7 3月のステップアップ  
3月の献金、献品  
施設報告
- P8 CF  
「施設につながるまで」
- P9 2nd StageCenter  
「とんだ、お花見」
- P10 今月活動予定



栃木 DARC®

## 「依存症回復支援におけるAIの役割」

特定非営利活動法人 栃木DARC  
代表理事 栗坪千明

依存症回復支援の現場において、AIの活用は、今後の支援の在り方を大きく変える可能性を持っていると思います。私たち支援者にとって重要なのは、AIを「何ができるか」ではなく、「どのように使えば回復につながるか」という視点で捉えることです。まず実感として、支援につながる前の段階で多くの当事者が離脱している現状があります。否認や羞恥心、時間的制約などにより、支援機関の扉を叩くまでに至らないケースは少なくない。AIは、この“つながる前の空白”に介入できる手段となり得る。匿名で利用でき、時間を問わずアクセスできるAI相談は、当事者が最初の一步を踏み出すための心理的ハードルを下げる。支援者としては、それを現実の支援にどうつなげていくかが重要なポイントとなる。次に、日々の支援の中で課題となるのが、当事者の状態変化の把握である。面接の場面だけでは見えない使用のパターン、気分の揺れなどを継続的に捉えることは難しい。AIを活用した自己分析は、この点を補完する。記録の蓄積と分析により、再発の兆候を早期に察知することが可能となり、支援のタイミングを逃さずに介入でき、また当事者自身が自分の状態に気づききっかけにもなります。

さらに、支援現場における人手不足や経験差の問題に対しても、AIは一定の役割を果たす。基礎的な情報提供や初期対応をAIが担うことで、支援者はより個別性の高い支援に集中できます。特に新人支援者にとっては、一定の質を担保した情報を得られることが支えとなる可能性があります。しかしAIの提示する情報を鵜

呑みにせず、最終的な判断は支援者が担うという姿勢は不可欠です。

ただし、現場に立つ者として明確に感じるのは、回復の中核はあくまで「人との関係性」にあるという点である。信頼関係の中で生まれる気づきや変化は、AIでは代替できない。AIの活用が進むほど、この点を見失わないことが重要になります。また、個人情報の取り扱いや倫理的な課題についても、支援者として慎重な姿勢が求められます。

今後は、AIと対人支援を対立的に捉えるのではなく、相互に補完し合う形での運用が現実的だと思います。AIによる初期接点の確保やモニタリングを活用しつつ、適切なタイミングで対面支援や自助グループへとつなげていく。この流れをつくっていくことがじゅうようです。

依存症支援において、私たちが向き合っているのは「孤立」です。AIはその孤立にアクセスするための新たな手段となり得るが、孤立を解消するのは最終的に人です。支援者として、AIを過信せず、しかし可能性を適切に活かしながら、回復につなぐ形で活用していくことが求められています。



栃木 DARC®

## 「活動報告」

栃木DARC

高田 秀夫

### 栃木DARCの事業

栃木DARCの事業の多くは、委託または助成を受けた形が多く、一般社会に向けての特定非営利事業と施設事業を行なっています。

特定非営利事業は、一次予防としての乱用防止、二次予防の再乱用防止を多く含み、施設事業は、三次予防以降となる依存症からの回復のための場所とプログラムの提供を行なっています。依存症本人が誰かに薬物を勧めることで薬物問題が広がるリスクを考えると、これも乱用防止の一環であると言えるでしょう。



春風が頬に心地よく、ようやく厚手の服を脱いで軽やかな装いを楽しめる日々となりました。皆様、お花見には行かれたでしょうか。

桜の季節がひと段落すると、次は木々の芽吹きが目に眩しい新緑の季節へと移り変わっていきます。窓を開けると入り込んでくる、春特有の柔らかな空気の匂いに、なんだかホッとする今日この頃です。

今年もまた農作業が本格的に始まる春がやってきました。何年も繰り返してきた種まきですが、指先に感じる種子の重みは、毎年新鮮な緊張感を与えてくれます。近年は予測できない異常気象も多く、農業を取り巻く環境は決して楽観視できるものではなくなってきたと感じています。

しかし厳しい冬を超えて目を出す雑草の力強さや、動き出した虫たちの姿を見ると、自然の一部として食を支えるこの仕事の責任を再確認します。

昨年は、本来やるべき作業が後回しになってしまったこともあり、その分の皆んなに負担をかけ、畑や田んぼの管理が十分に行き届かなかったことを反省しています。

これからは早朝の時間を活用するなどスケジュールを工夫し、二度と同じことを繰り返さないよう努めていこうと思います。

今年目標ですが、長年の経験に甘んじることなく、毎日の気象データなどを確認しながら、今の環境に最適な育て方を目指し、今後も美味し作物が作れるよう、新たな気持ちで土に向き合いたいと思っています。

毎年恒例行事で7月と11月に地域の保護司会の皆様、更生保護女性会皆様との交流会が行われる予定です。農作業やスポーツ等を通じて交流をさせていただいていますが、非常に心温まる経験となっております。

日頃の活動報告や何気ない日常の話しをしたり、農作業やスポーツを通じて得た信頼関係を大切に、これからも手を取り合いながら、誰もが安心して暮らせる地域づくりに貢献していきたいと思っています。

先日は、女性会の皆様にお菓子や飲み物の差し入れを頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。活動の合間に、皆で美味しくいただいております。

日ごとに暖かさが増し、外を歩くだけでも色々な発見がある季節。皆様の日常が、春の光のように暖かく穏やかなものでありますようお願いを込めて終わりにしたいと思います。



## 「心の豊かさを取り戻す」

### 依存症のジロウ

## 3rd Stage

### ～社会復帰～

3rd StageCenterは、社会復帰間近の回復後期・社会復帰期を担う施設です。1st StageCenterで断薬を目的として規則正しい生活や体力回復をし、2nd StageCenterで個々のプログラムを含めて過去の整理や人間関係の作り方を学んだメンバーが、実際の社会に近い環境で社会性の獲得と、健全な家族及び人間関係を身につけてもらう事を目的としたプログラムを組んでいます。本人の責任において生活するために起床、就寝などの時間も特に設けず、職場に出勤するのと同じようにプログラムの開始時間も設定しています。主体性を強化して社会復帰の準備を行う場所です。

はじめまして、ギャンブル依存症のジロウです。私は去年の9月に山形刑務所を出所し、10月にこの施設に入所しました。出所日、山形から仙台駅へ電車を乗り継ぎ駅に着き、目に入ったパチンコ屋に入りました。自動ドアが開きその光景を見て感じたのは「帰ってきたなあ」でした。服役中は、自分の過去に向き合い反省文を度々書きました。このノートは大事にしようと思っていましたが、パチンコ屋に入る前のコンビニで3冊のノートを捨てることができました。不安と緊張の中で少しずつ実感していき、受刑者となってしまった現実に落胆したが、当事者同士の支えや刑務官の訓示によって励まされ前を向くことができたが、出所1ヶ月前はほとんど眠れずにいた。ギャンブルをやめたいという気持ちとやめたくない葛藤に苦しみ、朝起きると枕に沢山の髪が抜けていた。出所する数日前には出たら少しだけギャンブルをしたいな、と決めていた。ここに来てから改めて振り返る。無力さとか狂気だとかコントロールできなくなったとか、悲しいかな全て当てはまるのではないかと。

私は人生に失敗したのだと、認めることができた。そして強迫的ギャンブラーの20の質問のうち全てに当てはまった。やっぱりか、重症じゃねえか、そりゃ上手く行くわけではないんだなと思えた。なぜパチンコ屋だったのか、幼き頃の苦しい記憶を思い出すのはつらい。父からの虐待、その時の母は私を見ないふりをし、うつろな目で酒を飲んでた。姉や弟ではなく私だった。学校ではいじめられ家に帰りたくなかった時見つけたのは、薄暗く干渉されず溶け込め、ゲームに没頭し嫌な事を忘れさせてくれるゲームセンターであった。父はギャンブルと酒が好きだった。母と度々揉め色々な物が飛び交い、まぶたや額から血を流

していた。そんな母を見ても何も感じなかった。パチンコには興味があった。アルバイト代を握りしめて行った。そこは似た雰囲気だった心地よさと同時にギャンブルに魅せられ染まり堕ちて行った。社会に出て生きづらさを親のせいにし、恨み憎しみ怒りをギャンブルにぶつけ歪んだまま数々の救いの手を振り払って生きてひとりになった。だが生き方を間違えた。人生次から次へと色々な問題が起こる時には逃げることも大切だが、逃げた方が上手く無かった。自分と向き合い、悩み苦しみ抜き乗り越えて行く経験を私はしてこなかった。居場所としてしまった原因はあるが、それを責めても解決できなかった。それでも私にはパチンコ屋という避難場所があったからこそ生きて来られたと思う。服役中にある受刑者と出会った。両親への恨みから殺めてしまったと話してくれた。私と同年代だが最低あと20年は務めなくてはならない人だ。ギャンブルに狂い金の為に家族と他人をだまし使い捨てたことは決して許されることではない。償いが必要だ。だが、もしかしたら自分もそうなっていたかもしれないと感じた時、怖かった。私は横領と窃盗を犯してきた。彼は人を殺めてしまった。罪の名は違うが、悔いて必死に前を向いている姿に感じるものがあった。自分が味わった苦しみを忘れ、他者を苦しめた。本当に愚かだと思ふし、自分が情けない。ギャンブルをやめていれば人間でいられると感じる。自分の中にある良心を開いたままに生きたい。出所前に担当刑務官が言ってくれた言葉だけは覚えている。「小さな幸せを見つくる。足るを知れ」と…。今それを実践している。



## 「過去の自分今の自分」

### 依存症のナナチャン

### 3sc ウイメン ～女性～

3scウイメンは女性専用の施設です。ファースト・セカンド・サードの全過程を同じ場所で過ごしながら、それぞれの回復を進めていきます。女性依存症者の多くは、それまで生きてきた背景に様々な問題を抱えています。生きるための道具だったアディクションを手放していくとき、経験を共有し合える仲間が小さな安心感を積み重ねてくれます。その安心感が私達を自己否定ではなく自己受容という形に変えてくれるのです。安全を感じながら回復を進めていくことができる場所とプログラムを提供すると共に、自分を大切に生きる方を身につけてくれるように願いながらサポートを続けていきます。

依存症のナナチャンです。今回初めてのニュースレターになります。私は本を読むことはそれほど苦ではないのですが、文章を書くのが苦手です。夏休みの宿題の読書感想文がどうしても書けず、兄弟に代筆してもらったくらいです。しかも、その読書感想文が何かの賞を取ってしまったものだから、自分が書いたものではない、と言うに言えず、すごく落ち込んだのを覚えています。これは私のトラウマです。仲間に話す事は苦手ではないけど文章を書くのは…と言うと「おしゃべりするみたいに書けばいいよ」と言われて、ちょっと気が楽になりました。取り留めのない話になりそうですが、よろしくお願いします。

私はアルコール依存症です。お酒は物心ついた頃から身近にありました。大人達はよく飲んでいたので。仕事が終わりに家に帰ってくると毎日、晩酌をしていました。だから、大人はお酒を飲むのは当たり前と思っていました。正月やお盆、何かの集まりの時には必ず、宴会になり盛り上がっていました。でも私たち子供は、別の部屋で遊ぶように言われていたので、様子がよくわからず、時々聞こえてくる声の調子で判断していました。怒鳴り声がかかってきたら喧嘩してると思い、いつも嫌な気分になっていた記憶があります。又、廊下ですれ違うお酒臭い人の様子がいつもと違って、急に説教っぽい事を言い出したり、なんか変なテンションで陽気になってたりで、お酒は人を変えちゃうんだとそのとき気付いたように思います。だから、お酒に対してはあまり良い感情を持っていませんでした。それに、他にも嫌な思いをしていたみたいですがそれはよく思い出せません。そんな感じで大人になりました。

学生時代に初めて飲むようになると、一緒に飲んでた友達がどんどん潰れていって、もっぱら介抱係になってしまい大変な思いをしました。ほとんどの人が初めてで、自分の限界

がわからなかったから当然といえば当然なのかも。こんなことが続いて大勢で飲むのはやめて、決まった友人と楽しむようになりまして。この頃、自分がお酒に強い事に気付いたみたいです。

仕事をするようになって、またもや介抱側になり楽しくなかったです。でも友人とは楽しかったのでもちやもこ飲むようになりまして。最初のうちは友人と外で飲むだけでしたが、家でも飲むようになり、仕事の事、会社の人間関係が複雑になり始めた頃から、少しずつ量が増えてしまいました。今思えば現実逃避したかったんだと思います。

でも本人は、好きだからとか気分転換できるからとか、これで明日も頑張れるとか理由付けて正当化していたようです。これは入寮してから気付いた事です。

そして友人が病気で亡くなったり、会社が倒産したりする度に量が増えていきました。子供の頃や酔った人の介抱で嫌な思いをしていたのに、自分がいざ飲みだしたら、楽しくなりこんな風になるなんて、あの頃は想像もしていなかったのに。怖い事です。これも入寮してから気付いた事です。

お酒の量もどんどん増えて、当然ですが体を壊して入院、そしてダルクに入寮となりました。入寮する1年前くらいから、もしかしたらアルコール依存症なのではと。でも認める事が嫌で逃げていました。認められたのは、入院、入寮と徐々に実感して、あーやっばりと思い、これからは先の事を考えなくてとは、やっと思えるようになりまして。

今は、自分自身と向き合い本当の自分を知り、新しい生き方を見つけたいと思っています。でもまだまだ長い道のりになりそうです。最後まで読んで頂いてありがとうございました。



## 「マイストーリー」

### 依存症のエリナ

## Ist Stage

### ～導入～

Ist StageCenterでは、回復初期に、生活習慣の改善と健康的な肉体を取り戻す事に主眼をおき、規則正しい生活を目的としています。グループワークや学習型のプログラムは少なくして、その分、作業やスポーツなどの体験型のものを多く取り入れて、使わない生活に楽しみが感じられることに重きを置いています。依存症者は充実感、安定感、所属感を取り戻す必要があり、この三つをできるだけ効率よく感じられるようにプログラムは組まれています。

こんにちは、薬物依存症のエリナです。自分は、令和7年12月1日に栃木ダルクに、八王子ダルクから施設移動して来ました。栃木ダルクに移動になった理由は色々ありますが、一言で言えば20回ほどスリップをしてしまい、薬がNO止まらなくなり、4回の精神科に入院したのですが、病院からでると、すぐに、プロン、アルコール、大麻を使ってしまいました。

前にいた八王子ダルクの施設では、正直さを大切にする所だったのですが、なかなか正直になる事ができず不正直ばかりしていました、自分は15歳ではじめて覚せい剤を使い、周りの友人とはじめはちょこちょこ使うようになり、17歳から使い方がどんどん変わっていき、毎日使うようになりました。

3回目の逮捕で2回目の少年院に行きました、2回目の少年院を出た後に八王子ダルクに入所し、1年8ヶ月お世話になりました。

八王子ダルクのプログラムは、正直自分にはきつくて、ついていけなくなりました。ですが、その時話しを聞いてくれたのが、八王子ダルクの施設長やスタッフでした。

1年8ヶ月いる間に出来たクリーンは3ヶ月でした、1ヶ月経ったら薬を使い、精神がおかしくなりはじめたらすぐに薬を使いました。いまは3ヶ月ちょっとのクリーンがあり、1度もスリップしていません。

正直自分には信じられません、でもうれしいです、栃木ダルクにきて3ヶ月ちょっとですが、自分は前からNAが苦手なのですが、正直それは変わっていません。

覚せい剤の欲求は今あまりないですが、多分今日の前にポンプとネタがあれば使ってしまうとおもいます。

栃木ダルクにきて2日目にはもうでたいといっていたのですが、ルールや、生活のやり方を覚えてきたら、少しマシになりました、自分は今年の4月25日に繋がって2年になります。スリップしなければ2年のクリーンがあったのですが、スリップは自分にとって、いい経験に

なっただとおもいます。これは、開き直っているわけではなく、本心で思っています。

今は、22歳で今年で23になるのですが、ダルクでお金のつかいかたや、自分が持っている精神障害があり、ADHD、不安障害、依存症をもってるのですが、これは多分なおることはないで上手く付き合っていこうとおもっています。

ダルクを出たら親元に帰ることをもう自分は諦めました。今いる施設はみんな仲良くやっています。

1番最初の施設なので人の出入が激しくて、ばたばたする時もありますが、自分には合っている気がします。

八王子ダルクのスタッフやメンバーに今も会いたいと思っています。元気にしているかな？クリーン続いているか？って考えたりします、でもプログラムにつながっていれば、イベントで会えたりするので、自分はその日を楽しみにしています。

少年院から直接ダルクに入所したので、正直遊びたい気持ちや、色々な事を考えます。1回目の少年院では、反省することなんかなく、早く出て薬を使いたいとしか、思っていないでした、でも今は薬を使わないと断言は正直できませんが、あの切れ目の時や、色々追い詰められていた時のことを考えると、使いたいとは思いません。

自分は覚せい剤で失った物が多くて、信用、お金、友人、時間、人格全て変わってしまいました。本当に怖い薬だとおもっています。

栃木が地元なのですが、多分友人はまだ薬を使っていると思うのでこれからは、薬関係を全て切って、新しい生き方を探していきます、周りの仲間からはまだ若いんだからといわれますが、社会に出た経験がないので、正直わからないです。

まずは、自分の体調や調子を整えて無理せずやろうと思っています。

これが、私のマイストーリーです

# プログラム紹介

## アサーティブ・プログラム

自分の感情を他人に伝える方法を身につけます。傷ついているという事を相手に伝えるには勇気がいります。相手を傷つけないで伝えるということも難しい事です。メンバーはこの事をうまく出来ず、結果的に自分を傷つけ、アディクションに逆戻りするような結果を引き寄せがちです。自分の思いをどのように相手に伝えるか、その最善の方法を身につけるグループワークです。



## スポーツ・プログラム

このプログラムにおける目的は「体力回復」ですが、その他ソフトボールやソフトバレーボールなどの団体競技を多く取り入れているため、対人関係の苦手なメンバーが普段話さない他のメンバーと話ができたり活躍の場があったりと、プログラムを通してメンバー同士の交流を図ることも視野に入れています。



### スタッフの独り言

栃木ダルクセミナーにご参加いただき、ありがとうございました。新年度を迎え、新生活でお忙しい時期かと思えます。

体調を崩しやすい時期でもありますので、どうかご自愛ください。

## 3 Stage System の概要

AAやNAなどの自助グループの12ステップを基に、意味を抽出したものを3段階にわけ、Stage 1～3を最短12ヶ月で行います。

### Stage 1

①認める②信じる③まかせることを通じて、自分のアディクションの問題を認め、助けてくれる存在を信じ、回復プログラムに自分の回復を任せるといった導入の部分を行います。

### Stage 2

①過去の整理②本質を探る③欠点を取り除く④手放す⑤準備する これまでの問題の分析をし、自分の問題の本質を探り、アディクションに繋がる部分を取り除き、自らの問題を手放し、社会の有用な一員となる準備をしてもらいます。

### Stage 3

①行動の変化②実行し続ける③配慮④継続として、これまで行ってきたStage 1、2のプログラムを踏まえ、どのように行動を変化させていくか、それを実行し続けるにはどうしたら良いか、また他者とのコミュニケーションはどのようにするか、これまで行ってきたことを社会の中で実践し続けていくには何が重要かを見出していきます。

## 3月にステップアップした仲間

### Stage up

- ・ヒコ Stage 2～Stage 3へ

### Role Model

- ・サカ メンバー～サポートへ
- ・トシ メンバー～リーダーへ

### 3sc ウイメン

- ・ヒロ Stage 1～Stage 2へ
- ・カナ メンバー～リーダーへ
- ・ナツ リーダー～チーフへ



## 3月の献金・献品

(献金) 那須トラピスト修道院様  
他匿名者7名

(献品) 那珂川町更生保護女性会様  
他匿名者9名

とても助かっております。栃木ダルク一同感謝しています。

### 献品のお願い

- ・日用品、家電一式、原付バイク、自転車、その他自立して使用できるものがあればよろしくお願ひします。
- ・CFから農機具関係(草刈機、農作業用品、トラクター)等あればよろしくお願ひします。

## 施設報告

1st(導入) 16名 2sc(回復) 22名 3sc(社会復帰)  
16名 計54名で活動しております。

ステージ毎のプログラムを実施しております。



## Community Farm

### ～農業～

栃木ダルクに通うメンバーの中には通常のプログラムが適さない方も少なくありません。CF（コミュニティーファーム）では、薬物依存症以外にも社会復帰を目指した際に問題（高齢である・重複障害がある）を抱えたメンバーがゆっくりと自分なりの回復を深めて、それぞれの社会復帰の形を探ってもらうための場所です。他の男性施設とは違い、テキストを使ったプログラムも少なく、ステージ毎に居場所を変える事はありません。農作業やボランティアなどを活動の中心にしています。金銭管理や処方薬の管理、家族の再構築など基本的な部分に時間をかけて丁寧に社会復帰の準備を行なっています。

## 「施設につながるまで」

### 依存症のヒロ

皆様、お疲れ様です。Remissionのヒロです。今回ニュースレターを書かせていただくことになりました。Remissionに来て二回目のニュースレターになります。最近、寒さも和らぎ過ごしやすい季節になってきましたね。

さて前回のニュースレターでは、施設に繋がる所までを書かせていただいたので、今回は施設に繋がってからのことを書きたいと思います。

最初に施設に繋がったのが二年前の10月頃だったと思います。その当時の自分は。仕事もせず、毎日パチンコをして、ほぼ毎日のように覚醒剤を打っている生活をしていました。そのとき付き合っていた彼女と一緒に暮らしていたのですが、彼女は自分が覚醒剤を使用していることは知らなかったので生活は出来ていましたが、一ヶ月も仕事をせずにそれまで貯めていた金も、無くなってしまいそれでも彼女に内緒で薬を使っていたが、どうしても生活や薬を買う金が回らなくなり彼女とは、距離が出来て少し離れることになってしまい薬を打つ回数も増えてしまい、どうにもならなくなってしまいこのままではまた刑務所に戻るようになってしまうのではと、考えて自分から施設に連絡を取り福祉のほうから繋がることになりました。最初は野木の施設にいたのですが、二ヶ月くらいたってから急に施設にいるのが嫌になってしまい一月一日に施設を勝手に飛び出して彼女の所へ帰りました。

でも結局薬を使用してしまい、三ヶ月しか外での生活が出来ず、また野木の施設にお世話になることになりました。再入寮するときには今回は、卒業するまではいようと決めて来ました。野木に戻って三ヶ月位した時にRemissionの方に移動となりました。最初は、自分に農作業が出来るのか少し不安でしたが、Remissionの仲間が一から優しく教えてくれたので少しだけですが楽しくなってきました。

たかなと思えるようになりました。

Remissionに来て一番最初にやった農作業は、子茄の収穫でした。ただ取るだけではなく、長さとか、太さとか色々あって出荷できるのが決まっていたので最初覚えるのが大変でした。

その他にも、ミニトマトやスイカ、かぼちゃなど、道の駅に出荷する作物や、あとは田んぼもやっていたので、本当に大変でしたが、一ヶ月くらいたってからは、体のほうも暑さに慣れてきて、朝の五時半からの作業にも慣れてきて少しずつ仲間の力をかりながら作業を覚えることが出来ました。

収穫の他にも、草刈りや除草だったり、ハウスを直したりとかやるのが沢山あります。また体を動かすのが嫌いではない方なので、自分にはRemissionの作業が遭っているような気がします。そして夏の暑い時期が終わり、秋になってくると、ほぼほぼ収穫するものがなくなってくると、今まで収穫していた畑を綺麗にして次の年の為の準備をしたりします。その他には冬の収穫のために、ビニールハウスに春菊を植えたりします。冬の間は、収穫といたら春菊がメインになりますので、夏に比べたら楽になります。

今は、もう四月になりましたので、春菊も終わり、夏に向けての準備をしている所です。もうRemissionに来て十ヶ月経ちましたが、これからも作業を頑張ってクリーンを続けていければいいと思っています。



## 「とんだ、お花見」

依存症のやっさん

### 2nd Stage

#### ～回復～

2nd StageCenterは、回復の中心を担っています。ある程度のクリーンを持ったメンバーが、各々のプログラムを深める時期にあたるので、過去を正しく振り返ること・メンバー同士の関わり方などをグループワークに参加しながら試行錯誤して自身の回復につなげていきます。回復を確かなものにしていくための重要な時期をこの施設で過ごしています。



光陰矢の如し、とはよく言ったもので刑務所4年満期の刑を終えて、施設入寮生活に入って10ヶ月を経過中です。まだ半年ぐらしか経っていないような感じが年を取ったせいか、体感速度が感じられます。今、外では梅の花が満開で桜の花も、そうなる頃を向かえております。NAでは依存症の同病相憐れむの仲間とのミーティングも盛んになっております。さて前置きはこれくらいにして、桜の下での花見で酔っ払った青年の話に入ります。御袋から子供の頃に聴かされたキツネが人間を化かすもので、場所は高崎の観音様から、山ずたいに1km北へ行った所にダルマさんで有名な少林山があります。御袋の実家がそこから、また1kmぐらい北にある、町屋町の農家です。御袋自身が子供の頃に体験したことなのですが、夜になり実家から少林山方面を眺めていると、小高い山の中腹ぐらいに、光が数珠つながりに蛇行して、ついたり消えたりしているのが見えるのだと言っていたことを、よく子供心でも妙に不思議に思いながら聴いていた覚えがありました。私がなんで火もなく光がない所にそのように見えるのか聴いたら、そう、まさに嫁入り最中であり、集団で結婚式を挙げているとこだと言う。酔っ払った人間でも近くを通ればそれこそ化かされて臭い目にあわされるのが落ちだという。今でこそ衛生上なくなっていると思いますが田舎へ行くと菜っ葉物（白菜やキャベツ）の有機肥料に使うための肥溜め（ふん尿）が、畑や庭の片隅に作ってありました。ある晩、お花見帰りに酒に酔った若者が近くを通りがかると、どこからともなく、何とも表現できない、人を引きつける良い香りがしてきて、白ユリの花の様で小股の切れ上がった、いい女が目の前にはいるではないか、手ぬぐいを頬 被りしていて

正面は向かない、この近くにいい温泉が湧いていて、ご一緒に入りませんかと女が誘っている、若者は顔を見たいのだが、見ようとする、いじらしく巧みにかわして絶対に見せない、だけれども若者は好い事幸いとばかり自分から飛び込み、女も入って来ると思い待っていたが、一向に入って来ない、我慢もできず、あまりに好い加減の湯船なので、つい、うとうとしてしまい、その中（こえ溜め）で、すやすやと、ぐっすり眠って朝になるまで気がつきません、体中がくそだらけになりキツネに化かされた時は明らかに判らず自分だけが溜めの中だったということでした。キツネやタヌキ、またはオオカミなどの類で日本で絶滅したのはオオカミですが、キツネは当時、関東方面でも見られたようです。一説では、この嫁入りは、キツネ同士が体を擦り寄せて静電気を発生させて光るのだと、ある科学雑誌で読んだことがあります。それにしても、キツネは稲荷の神の使いとされ、人に乗り移るとも、人を騙すともされています。今の我々、アディクトたちは少なからず、臭い思いはしないまでも、この若者の心境に近づいたのかもしれない。施設に居る内は好い子でも娑婆の空気を吸ってしまい、御袋がよく言っていた、喉元過ぎれば熱さを忘れる。の言葉を思い出します。現代バージョン風のキツネの嫁入りは、より巧妙化して、好い臭いから始まり香水やアルコールのお誘いにはダルクで鍛えた精神力で対処しようと思う。

## 今月活動予定

### 4月

- 11日 家族教室 再乱用防止教育事業県央
- 12日 盲導犬ふれあいデー
- 14日 宇都宮保護観察所プログラム
- 15日 岡本台病院プログラム 喜連川少年院プログラム
- 21日 再乱用防止教育事業県南
- 23日 再乱用防止教育事業栃木県精神保健福祉センター  
宇都宮保護観察所プログラム
- 27日 岡本台病院連携会議
- 28日 宇都宮保護観察所プログラム

### 5月

- 7日 栃木県立矢板東高等学校講演
- 9日 家族教室 再乱用防止教育事業県央

発行所

郵便番号一五七—〇〇七二 東京都世田谷区祖師谷三—一—一七—一〇二号  
特定非営利活動法人障害者団体定期刊

定価100円

編集 特定非営利活動法人栃木DARC

〒321-0923

栃木県宇都宮市下栗町 2292-7

TEL 028-666-8536 FAX 666-8537